「気遣ってくれる人がいる」と子どもが感じることが大事

教職に携わるメル友から次のようなメール（抜粋）が入った。
【　アドバイスいただきたいことがあります。
（家庭の事情が要因で）荒れ出した子（小学低学年）がいます。
私は何とかその子を支えたいと思ったのですが、その子から「どうせ先生はずっといないんでしょ！（転勤したり、担任が変わったりしてずっと自分のことは見ててくれないでしょ。という意味かなと思います。）」と言われてから、子どもに深く入っていけない自分がいます。　】

厚かましく、次のように返信（抜粋）した。
【　自分は、（抱きしめながら）次のようなことを語りかけますね。
「そうだよねぇ～、先生もいつか○ちゃんと離れるのは、辛いし寂しいなぁ～。
でも、人間みんな、誰にもいつかは別れがあるよね。
だからこそ、先生は、○ちゃんと一緒にいる今を大事にしたいと思っているの。」と。

小学低学年の子どもがこの言葉の意味を理解するとは思いませんが、何かは伝わるような気がします。
そうしたお互いの心の想いの伝え合いのやりとりの継続こそが、コミュニケーションであり、教育活動ではないでしょうかね。

あなたは「そう云われても……」と思うでしょうが、それでいいのです。
「自分のことを気遣い、思ってくれてる人がいる。」と、子どもが感じることが大事なこと。
子どもの先々まで一人の教師として全責任が持てないからこそ、自分と離れた（別れた）後も子どもが一人の人間として歩んでくれるスキルが一つでも二つでも身についてくれることを願いつつ、今、どう係わり合い続けるかの過程こそが、教師として大事なことのように思います。　】

後日、メル友から次のようなメールをいただき、少しは参考になったようでほっとした。
【　先日はメールの返事ありがとうございました。
読んでいて涙が出てきてしまいました。
うまくいくことなんて考えずに、とにかく前向きやっていこうと思いました。
取り急ぎお礼まで。ありがとうございました。　】

推測するに、現場の教師は日々こうした子どもとの生々しいやりとりに戸惑いが多いのかもしれない。
子どもが前向きに歩んでもらうためにも、まずは教師に前向きになってもらわないとね。
こうした問いには「こうだ！」という答えがないだけに、まずは教師の戸惑いにも、側で立場を離れて寄り添う人の必要性を感じる。

阿部幸泰　　（2008 年 6 月 3 日　記）